5-13~15沖縄闘争へ全都-全国から総決起せよ

沖縄返還を巡る諸動向とわれわれの闘いの展望

沖縄返還の日は迫っている。五・一五沖縄返還は刻々と迫っている。返還を目前にして、沖縄をめぐる動向はどのようになっているか。第一にアメリカ帝国主義者はベトナムでの敗北、南ベトナム政府の自壊と破産を目前にして、沖縄の反革命基地強化へ狂奔せんとしている。68年テト攻勢での敗北、ジョンソン和平声明、ニクソンドクトリン、米中接近と続けられてきたベトナム革命戦争の地域的限定化と引きかえに、ベトナムから地上主力戦力を撤収する路線は破産しつつある。アメリカ帝国主義はこの路線の破産の前に、再度ベトナムに反革命軍の主力として、とりわけ地上戦闘へ全面登場するか、完全敗北かの地獄のような選択をしいられている。

ベトナム戦線への地上軍を含めた全面登場は彼らにとって地獄への道である。それは拾いあげただけでも次のこととして指摘出来る。それはすでに公然化し、日常化した軍隊、軍組織の崩壊の加速的激化、反戦斗争の高揚であり、自壊の進展である。アメリカ経済の破綻、国際―国内危機の激化である。彼らの完全撤退―完全敗北もまた地獄である。何故ならベトナム革命戦争の地域的限定化という至上でかつ最低の線を崩すならばアメリカが戦後世界で維持してきた軍事的、政治的支配力の解体の加速的一歩となるからである。

彼らは中国、ソ連を軸とする取引きの画策から核兵器をも含む近代技術、兵器を投入しつつ、ベトナム反革命戦線強化へ狂奔している。そして沖縄を戦略拠点として、実質的な軍事的戦略や軍政的支配力保持をあらためて強化せんとしている。

第二に五・一五沖縄返還によって沖縄の直接支配へ向わんとする日本帝国主義者はどうか。3月7日深夜より3月8日早朝にかけての陸上自衛隊先遣隊立川進駐の直後、3月10日の航空自衛隊先遣隊物質の那覇港陸揚げ発覚とその泥縄的処理に狂奔した佐藤政府は矛盾的諸問題の一切を可能な限り5月15日以降に引き延し、なにがなんでも5月15日を無事のり切らんとしている。彼らの意図は自明である。5月15日を契機にアメとムチの両面政策で日―琉一体化を遂行せんとしているのだ。自衛隊進駐―基地用地の再契約から行政―自治組織の本土化等々を両面作戦の上に貫徹せんとしている。沖縄民衆の本土復帰（異民族支配から解放の欲求）を異族支配へかすめとった日本の政府、ブルジョアジーはその国民的統合力への転化に対してこうむっている抵抗をアメとムチで突破せんと画策している。

第三に沖縄民衆はどうか。

アメリカ軍政支配と異民族支配の抑圧と矛盾の中で、その解放を志向した沖縄民衆はそのエネルギーと力を日本ブルジョアジーの本土復帰―沖縄返還にかすめとられてきた。沖縄のアメリカ軍政支配や異民族支配は日本ブルジョアジーが戦後世界における帝国主義支配の一環を構成するものとして積極的に合意したものであった。

だから日本ブルジョアジーの再支配が米軍政や異民族支配とかわりのないものであり、唯、異った幻想下支配であるにすぎない。復帰欲求が日本の政府―ブルジョアジーにかすめとられ、再編され、その実体が自日のもとにさらけ出されていく度合において、沖縄民衆は沈黙へといたりつつある。だがこの沈黙は沖縄民衆の怒りや失望をないまぜたちようど戦後の日本民衆のそれと似た姿である。

アメリカ帝国主義者、日本帝国主義者、沖縄民衆、この三者の沖縄返還をめぐる動向の中で、われわれにとって沖縄返還局面は何か。われわれは何をなすべきなのか。

5月15日、沖縄返還の局面はわれわれに重い心の負担としてある。重い心の負担、それは沖縄の遠さである。沖縄のイメージ、沖縄民衆の沈黙の遠さである。この遠さは今日、主体的後退戦の局面を形成している国家的、政治的なものの遠さと同じであるといってよい。

だとすれば、われわれにとって、沖縄の遠さを解く道は国家、政治的なものの遠さを解く道と同じであるはずである。その道はどこか。われわれはこの要因が、つまり、沖縄や国家、政治の遠さの要因が、歴史の新段階、新局面ともいうべき情勢―情況にあることを押えなければならない。それは比喩的にいえばヘーゲルやマルクスの時代が国家・民族の興隆期であり、レーニンやトロツキーの時代が国家・民族の成熟期であり、われわれの時代が国家の老化・衰退期であるというように。

国家や民族の老化・衰退期の故にこそ、われわれにとって、沖縄や、国家、政治が遠いものとしてやってくるのである。このあらわれは現代の支配階級たるブルジョアジーにも等しくあることだ。

がわれわれとブルジョアジーの決定的ならがいは彼らが老化し、衰退する国家や民族を死滅させることも、無化させることも出来ず、逆に国家や民族を絶対的根拠とすること、これである。だから日本のブルジョアジーは彼らの国家的、民族的統合力、軍事力強化として沖縄をくいこみ、再編せんとする。これとたたかう道はどこか。ブルジョアジーに対する一対一対応ならば、これははっきりしている。それは沖縄人民、民衆が日本人による異族支配を拒否し、独立した国家や自治を獲得することである。そしてブルジョアジーの軍事・戦争能力強化を粉砕することである。われわれはこのような斗いを過渡的、部分的なものとして認める。例えば前者が沖縄民衆・人民の切実な斗いとして形成されたとき。

けれども、われわれはこのような道程の中に、われわれの沖縄、国家、政治的なものの遠さを、また沖縄民衆の絶望的な沈黙をとくたたかいがないことをはっきり指摘せねばならない。われわれの最も切実で、困難なたたかいがここにあることも。

沖縄や政治、国家の遠さに対して、これをわれわれが沖縄民衆・人民・アジア人民、被差別者に対する無関心、無責任のせいだというのはあたらない。これらは唯だ、われわれ自身、民衆への啓蒙のたちあらわれにすぎないからである。啓蒙がなのは決して人を根源から動かさないからである。

沖縄民衆の絶望的沈黙とわれわれの沖縄、政治、国家の遠さという切実で、リアルな課題を赤い糸のように結び、ブルジョアジーの沖縄併合、再編成を根本から粉砕出来る内実は何か。

国家・民族の老化や衰退を、ブルジョアジーのような半面的な国家・民族の解体政策（世界的再編成）でもなく、民衆の無関心でなく、国家・民族の死滅、無化へつき進むことである。このようなものとして沖縄はわれわれの最大の拠点であり、根拠地なのだ。近代世界の最も高次で普遍的で、かつ永続的な民族・国家の精神、力、即ち理念、現実で死滅へ進める拠点であり、磁場なのだ。

われわれは帝国主義者―ブルジョアジーの沖縄併合、帝国主義的諸再編、就中、この中軸としての自衛隊進駐、反革命最前線基地化、沖縄の政治的、社会的諸組織の本土一体化等々に対する沖縄、日本人民の抵抗とたたかいをこの内容へ統合していかなければならない。

五・一五をして、日本ブルジョアジーの、ベトナムでのアメリカのごとく死の泥沼・苦悶への開始たらしめよ。擬制的沖縄斗争の終りと新たな沖縄闘争の開始へ向って前進せよ！

5・13集会への呼びかけ

全ての労働者・学生・市民の皆さんへ5・13集会への結集を呼びかけるにあたり、われわれは次の様な意図を明らかにします。

沖縄返還を目前にして支配層の国境拡張、沖縄民衆の日本国民化に、本土―沖縄民衆は如何なる反撃と追攻を為しうるか。そこが、政策論議の底の、民族―国家問題から五・一五を把える基底です。戦後二七年を捨象しての支配層の国境回復―沖縄県民論と同様、明治百年を捨象し、歴史的文化形成を無視した、日沖ブロ独、日沖ソビエト等、は観念の中で国境を越えているに過ぎません。沖縄現地で急速に高まっている日本軍虐殺の弾劾等は、如何なる良心的本土民衆も、手ぶらで沖縄民衆と現在連帯し得ない怨念の所在を示しても、戦争がつきつけた現地人の避難民虐殺や、本島―先島差別への民衆の回答を明らかにしえません。

五・一三集会は、この様な問題に応えるべく我々がこの間主張してきた、国家―民族視点からの日本―沖縄への掘り下げをそれ自体として政治的に完結する事なく、他領域での最も優れた俊傑達と発言を共にするという点では、党派への空気入れの為の諸々のアジテーション等とは全く別な我々のいう所の民衆の財産としての綱領創出への現段階的水準の表明でもあります。

現代思想を考える場合誰もが避けて通れぬ思想者、吉本隆明氏は南島論の擱筆を機に、ここ二年間の日本―沖縄への沈思のエッセンスを提出します。

沖縄の地で、沖縄に固執し、沖縄から世界への視点を煮つめて来られた那覇市職の上原生男氏は、生まれざる思想を産み落す沖縄の可能性をかけて、琉大新聞、沖縄タイムス等での発言を、現時点での沖縄の思想と運動に引きつけて展開します。

本土在住沖縄青年の連帯と運動を持続的に担って来られた沖青同の中里効氏は、本土新左翼運動への批判的視点から、苦渋に満ちた沖縄の明日を提言します。

共産同神津陽は、沖縄での4・28見聞を含め、日本―沖縄―世界についての我同盟の政治的、思想的到達点を明らかにします。

以上の意図と陣容でもたれる五・一三集会は、発言内容に限ってみれば、同一性より差異性をより多く顕わにするかも知れません。だが我々の〈かくめい〉への道程において、今必要な事の一つは、おうむ返しに同じ事をしゃべる口舌の党派や、自らの頭の中での均衡のみを求めるエセ学者や、決して自己解体しない滅亡派インテリと異なり、他者との、世界との関わりで自らの位置を明らかにする事、差異を差異として受け止めた上でそれを統合する別のスケールを創出する作業であります。

日本―沖縄の抗道を探る試みへ共に参加しよう。

五・一三沖縄討論集会へ総結集せよ！

5-13 沖縄討論集会

P・M・4時（開場）―9時・中野公会堂

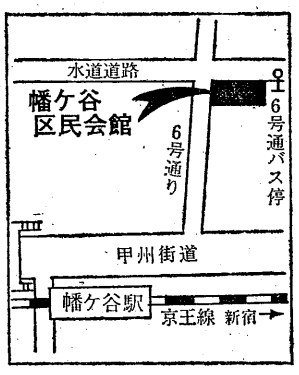
発言者・吉本隆明・上原生男（那覇市職）・中里効（沖青同）・神津陽（共産同）

主催・共産主義者同盟

5-14 全国反帝戦線総決起集会

P・M・6時・幡ケ谷区民会館

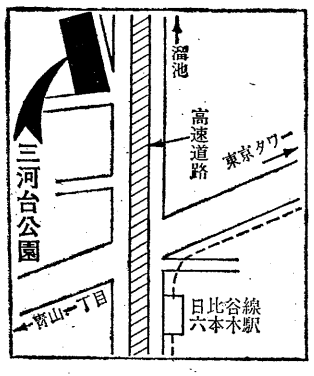
（交通）京王線幡ケ谷駅下車6分
京王バス　新宿西口京王デパート前から
⑳中野車庫行―6号通バス停下車

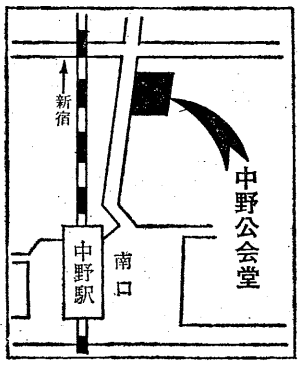


5-15 沖縄闘争

P・M・2時・港区三河台公園

（交通）地下鉄日比谷線六本木駅下車溜池方向5分





叛旗―号外―
共産主義者同盟
「叛旗」編集委員会
1972年5月10日